

世界剣道選手権大会における礼法

～外国人選手の礼法の実態と日本人選手が求められる礼法～

竹中 健太郎

鹿屋体育大学 講師

1 はじめに

1970年に国際剣道連盟(以下 IKF)の主催で第1回世界剣道選手権大会が東京(日本武道館)で開催され、38年経過している。大会は3年ごとにアジア、ヨーロッパ、アメリカの各ゾーンの持ち回りで行われている。台北(台湾大学体育館)で行われた第13回大会(2006年12月)で、常勝日本が男子団体の大会史上初めて敗れたニュースは記憶に新しい。来年8月にはブラジル(サンパウロ)にて第14回大会が開催予定である。第1回大会当時17ヶ国・地域の参加により男子個人・団体の2部門制で歩みはじめたこの大会は、第10回大会で女子親善試合が行われ、第11回大会で女子個人、第12回大会で女子団体が正式種目に組み込まれた。第13回大会では44ヶ国、男子286名、女子146名、計432名が参加し、今や世界剣道選手権大会は名実ともに国際大会にふさわしい規模へと発展した。

日本代表選手団及び大会実行委員として筆者が参加した第10回～13回大会までの4大会を振り返り、世界選手権大会における各国選手の礼法の実態及び日本人選手に求められる礼法について提示し、礼法再考の契機としたい。

2 世界選手権大会での外国人選手の礼法

全日本剣道連盟(以下 全剣連)が母体となる IKF は剣道の伝統性と文化性を重視し「武道としての剣道」の国際化に着手したことは周知の通りである。我が国から発信された剣道は IKF 創設から38年経過した現在においても防具や竹刀、試合・審判規則など原形を変えることなく普及発展してきた。したがって IKF が主催する世界選手権大会の試合・審判規則は全剣連の定めるそれが採用されている。勿論、立礼及び蹲踞の所作も全日本剣道連盟の礼法に則り行われている。加盟国の中で唯一独自の礼法を有し、国内の大会では蹲踞を省略した礼法を用いている韓国選手団も、世界選手権大会では全剣連の礼法にて参戦している。

4大会を通じての外国人の選手の礼法の実態は以下の通りである。

①全出場選手を通して

過去4大会いづれも全選手を通じて礼法の乱れた選手を目にすることは極めて少ない(国内の地方レベルの大会よりも礼法が整っている)。ただし正式種目となって歴史の浅い女子の試合においては審判から礼法について指導を受ける場面を見受けることもある。経験年数の浅い女子選手の大会派遣を余儀なくされる諸国の普及事情が背景にある。

しかしながら、各国ともに世界選手権大会に臨むにあたり、代表選手への指導が徹底されている様子はいかがえる。IKF 発足以来の全剣連の指導員派遣、国際協力事業団の青年海外協力隊の剣道コーチ派遣、あるいは個人レベルでの海外指導などによる礼法を含めた「武道としての剣道」の精力的な普及活動の成果であるとも言える。

②技術の優劣と礼法

国ごとで礼法の所作の優劣よりも、技術の習熟レベルによる礼法の格差が目にとまる。特に抜刀、納刀の所作、蹲踞の姿勢は競技力が高い選手ほど洗練されている。入賞レベルの選手層の礼法の所作は国を問わず素晴らしい。競技レベルの向上に比例して、概ね礼法も洗練されるものと考えられる。

③道着、袴及び防具の着装と礼法

技術の優劣と同じく、着衣、着装と礼法の所作も相関関係にあり、着装の美しい選手ほど礼法の所作も整っている。具体的に示すならば、礼法の動作に緩急があり、品位と風格がある。国内での剣道は「見せる」という演武的要素も強く、礼法での所作は技術の優劣に含まれると捉えている有段者は少なくない。外国人選手も熟練度に比例し日本人同様、「美」を剣道に求める志向が強まるものと推察される。

④ヨーロッパ諸国の選手の端正な礼法

国ごとで比較するならば、ヨーロッパの剣士の礼法は端正である。技術的には大会の上位に進出する競技力を有する選手は少ないものの、試合場での礼法の所作は入賞国に劣らない。アジア、アメリカゾーンの選手団は日系人が多いが、ヨーロッパ諸国の選手に日系人剣士は極めて少ない。彼らの剣道をはじめの動機の殆どが「日本文化」「武道」「武士道」などへの興味関心であることから「武道として剣道を捉える」高い意識が礼法の所作にあらわれているものと考えられる。

⑤民族性、生活文化の差異による「礼」への意識

剣道での「礼」とは立礼や蹲踞の所作のみに留まるところではなく、試合を待つ時の姿勢や態度、防具の着装時、試合場への入退場など試合場以外での立ち振る舞いも含み広義に渡ると考える。世界大会では勝利の喜びを前面に表現する外国人選手を目にすることもある。国内大会での同様の行為は「相手に対する礼の欠如」と厳しく戒められるであろう。そういった意味では日本選手の「礼」の意識とは若干隔たりがあることは否定できない。しかしこれは彼らの武道としての精神性の理解度の問題ではなく、民族性、生活文化の違いから生じる事象だと理解するところである。

3 日本代表選手に求められる礼法

世界選手権大会へ派遣される日本選手団の選考は、3年越しで行われる選手強化訓練講習会によって選考される。国内の各大会結果および各職域から選考された選手が集い鎗を削るわけであるが、試合成績のみで代表選手が決定するわけではない。卓越した技術はもちろんであるが、礼法や姿勢態度、稽古の取り組みなど様々な要素が選考の基準となる。特に礼法については、講話や稽古を通して念入りに指導が徹底される。立礼や蹲踞をはじめ移動時の竹刀や面の持ち方、防具の脱着や正座の仕方などの細部に至るまで代表選手には他国の選手の範となる礼法の習慣化が求められる。

第13回大会で敗れたとはいえ日本剣道は技術的内容、礼法、試合場での立ち振る舞いのいずれも武道(剣道)の宗家として世界の最高水準であることは言うまでもない。同大会でアメリカチームに敗れた瞬間、日本選手には想像を絶する動揺があったはずであろう。しかし、堂々たる毅然とした礼法を終始徹底した日本チームの振る舞いは、会場の各国の選手、観客から拍手喝さいで称えられ、その後紙面でも高い評価を受けている。世界大会では「強い日本選手」への憧れもさることながら、「日本人選手の美」に感動を覚える剣士も少なくない。構えや打突動作のみならず「礼法」の所作も剣道の「美」を形成する重要な要素となる。

過去4回の世界剣道選手権大会を通して、武道精神を最も世界に発信していく最良の方法は日本選手団の礼法をはじめとする会場内の立ち振る舞いにあると実感する。今後は諸外国の技術レベルの向上により、



勝敗に関しては苦戦を強いられることは否めない。それ故に「武道としての剣道」を守るためには、これまで以上に「礼」を重んじる意識と態度が日本選手には不可欠となるであろう。

4 おわりに

2005年4月剣道が国際競技連盟（GAISF）への加盟したことは周知の通りであり、今後剣道がどのような道を歩むのか懸念される場所である。オリンピック参加論争も浮上する今、国際化、競技化が進むあまり、剣道が武道としての精神性を置き去りにして進んでゆくことは避けて欲しいと願って止まない。競技としての合理性を追求するあまり、国際大会において現在用いられている礼法が簡略化されるようなことは断じてあってはならない。

国立大学法人で唯一武道の専門課程を有する鹿屋体育大学で今後も後進の指導に携わるにあたり、本シンポジウムにて今一度「礼」の真意を再認識できれば幸いである。

参考文献及び資料

1. 全日本剣道連盟 『三十年史』
2. 全国教育系大学剣道連盟 『ゼミナール剣道』
3. 全国教育系大学剣道連盟 『教育剣道の科学』